Behind THE ART

コンテンポラリーアートを支えるギャラリスト

vol.15

夫馬正男

（FUMA Contemporary Tokyo / BUNKYO ART）

昨年7月に八丁堀に引っ越した FUMA Contemporary Tokyo / BUNKYO ARTの会場。天井高は6m。

八丁堀に移転し、再出発

1982年創業の文京アートが、昨年7月、八重洲から八丁堀へ移転し、スペースを大幅に拡大した。ビルの9Fにあたる展示スペースは壁でふたつに仕切られ、さらに螺旋階段をあがるとロフトスペースもある。天井高は約6メートルと高く、立体作家にも好評だという。

文京アートといえば、平賀敬、小山田二郎、金子國義、鶴岡政男など、戦後現代美術の異色作家を扱ってきたことで知られているが、2003年頃からは、若手作家も扱っている。

「長い間、扱ってきた戦後現代美術の価値が上がってきたおかげで、若い作家を応援する余裕ができたのが2003年頃。数名の若手作家を扱い作家として、画廊での展覧会のほか、2006年からは海外のアートフェアにも出展しました。韓国のKIAF、上海、香港などへ出展するうちに、アジアの中でも日本人の若手は通用すると確認することができたのは収穫でしたね」と語るのは、オーナー・夫馬正男氏だ。

「このことによって、文京アートは、戦後現代美術の軸と若手作家の軸の、ふたつの軸を持つことになりました。

このふたつの軸をより強力に打ち出していくために、広い場所に移り、ギャラリーの名前もフマコンテンポラリートーキョーと文京アートに変えました。棲み分けとしては、文京アートがこれまで通り戦後現代美術、フマコンテンポラリーが若手作家。スペースも壁で仕切られていますから、それぞれの魅力をより発揮する事ができるようになったんです」と言う。

兄の影響で美術の世界へ

夫馬氏が美術業界に足を踏み入れたのは、コレクターでもある13歳年上の兄・夫馬豊治氏の存在がある。

事業で成功した兄の豊治氏は佐伯祐三、岸田劉生などのマスターピースをコレクションした後、小出楢重、前田寛治、松本竣介、鬚光等の大作や、小山田二郎、平賀敬、金子國義といった異色の作家のコレクションをはじめる。

そんな中、弟の正男氏は71年に上京。兄の紹介で銀座のパピエ画廊でアルバイトをはじめる。当時は絵画ブームで1年間で絵の値段が10倍になることもある状況であったが、絵画ブームはわずか1年で終焉。そこで、夫馬氏は海外のアートシーンを見たいと、パリに留学する。当時、パリには国際青年美術家展大賞を受賞し、現地に滞在していた平賀敬がいた。

「パリでは、平賀さん宅へおじゃましたり、美術館や画廊を訪ね歩いたりしました。でもルーヴルは私には古く感じました。衝撃を受けたのは、パリ国立近代美術館でみたルソー、ジャコメッティ、ベーコンなど。雑誌でしか見たことのない、それまでの作品とは全く違ったものでした。それからグラン・パレでみたデュビュッフェ、プチ・パレでみたヴォルス。パリでの経験が私の価値観に大きな影響を与えていると思います」と当時を振り返る。

その後、兄が銀座にフマギャラリーを開くということで帰国。兄のもとで働くことになる。

フマギャラリーは、その当時では珍しかった打ちっ放しの天井をはじめ、コレクションをしていた戦後現代美術作家の展覧会、さらには福田繁雄、永井一正らグラフィックの展覧会を行ったりと、異彩を放っていた。寺山修司、澁澤龍彦、黒柳徹子、篠山紀信、宇野亜喜良、吉行淳之介、横尾忠則等、多数の文化人が訪れていたという。

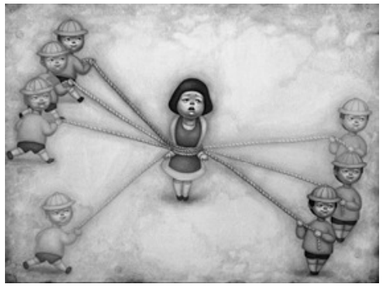
平賀敬「H氏の優雅な生活」1969年　油彩、キャンバス
162.2×130.3cm　第10回サンパウロ・ビエンナーレ出展作

文京アート設立へ

そして夫馬氏は82年に独立、文京アートを湯島にて立ち上げる。兄のフマギャラリーが縮小の傾向にあったため、扱い作家の中でも自分が好きだった作家を受け継ぐ形となった。88年には銀座に画廊をオープン。オープニングは瑛九、鶴岡政男、山口長男の3人展であった。当時は年6回程度の展覧会を開き、中村宏、池田龍雄、山下菊二等のグループ展や駒井哲郎、清宮質文、浜田知明、福井良之助等の版画展も行ってきた。

コレクター気質がある血筋なのか、作品への思い入れは強い。

「例えば、平賀敬で一番好きなのは65年から75年くらいのサイケデリックな時代に描かれた貴重な油彩作品。当時、抽象全盛だった日本のアート界に物語性を持ち込んだ作家のひとりで非常に好きですね。新作をもらうこともありましたが、コレクションしたい作品はなるべく購入して、展覧会のためにストックしていく。自分が好きで買う、ということが画商の責任だと思ってます」と夫馬氏。



右：小林美樹「turn turning turn」2010年
油彩、キャンバス　97.0×130.3 cm

中：斉藤桂「止まらない羽化」2009年
油彩、綿布、パネル　181.8×227.3cm

左：金巻芳俊「Keishou epoch」2010年
楠、彩色　H72×W14×D26cm

そうして集めた作品を、画廊での展覧会の形にしたり、全国の美術館に貸し出したり、収めたりしてきた。2000年に平塚市美術館で開催された平賀敬展などは、こうした画商の存在なしには語れない展覧会のひとつであろう。

フマコンテンポラリートーキョー

さて、もうひとつの軸である若手作家であるが、一見全く違うものに見えるが、作家を選ぶ基準は、戦後現代美術の作家と変わらないという。

「私が扱うのは、技術力があって、現代を反映するような社会性のある作品。それからインパクトも重要視しています。

一貫して、風景よりは、人物作品が多いです。そういえば、ピカソやベーコン、デュビュッフェなども人物ですね（笑）。

小林美樹は、幼少期の体験をもとに作品作りをしている作家です。現代風でありながら色調を抑え、ノスタルジーを感じさせる作品が魅力的です。

彼女の場合、大作も小品も同じクオリティで描ける力を持っている。2月24日～3月13日には川口市立アートギャラリー・アトリアで30点規模の展覧会を行います。

斉藤桂をみつけたのは、武蔵美の芸術祭です。今、写実作家は数多くいますが、彼ほどの凄み、執念を感じさせる作家はなかなかいない。劉生の切り通し図のような迫力を感じますよ。

立体の金巻芳俊は人間がもっている複数の感情を一木で表現しています。社会性がありながらユーモラスな表現が人気の作家です。この冬、海外の画廊での個展が決まっています」と扱い作家を評する。

最後に夫馬氏にとって、ギャラリーの仕事とは何かを聞いた。

「ダニエル＝ヘンリー・カーンワイラーが、こう書いているのを読んだことがあるんです。

※『私から作品を買った人は私の生活を支え、買ってくれなかった人は私に作品という財産を残してくれた』と。

弊廊の場合、委託もありますが、気に入った作品は買い取りで在庫していきますので、この言葉にはとても共感するところがあります。画商が買い取ることで作家の生活を支え、日本のアート界の下支えになればと思っています。

またギャラリストの仕事というのは自分を向上させてくれるものだと思っています。作家がアウトプットした想いを、展示という行為で昇華させる。彼等が創造した世界に共鳴できた時、そこにエネルギーが生まれ、私自身を新たな世界へ導いてくれるんです」と。

[FUMA Contemporary Tokyo/BUNKYO ART]

〈沿革〉　1982年湯島にて創業
1988年東京銀座に「文京アート」開廊
2000年八重洲に移転
2010年現住所に移転。画廊名を「FUMA Contemporary Tokyo/BUNKYO ART」と改名
〈ディレクター〉　夫馬正男
〈住所〉　東京都中央区入船1-3-9 長崎ビル9F
〈電話〉　03-6280-3717
〈E-mail〉　bunkyo.art-fuma@almond.ocn.ne.jp
〈WEB〉　http://www.bunkyo-art.co.jp/

〈扱い作家〉

[FUMA Contemporary Tokyo]
青山幸代、朝倉景龍、麻生知子、一井弘和、うんば、金巻芳俊、小林美樹、斉藤桂、坂上ちさと、佐々木かおり、鈴木弥栄子、松本真由子、安田梓、山内康嗣
[BUNKYO ART]
小山田二郎、金子國義、駒井哲郎、草間彌生、清宮質文、鶴岡政男、浜田知明、平賀敬、三木富雄、吉仲太造

※『わたしの画廊わたしの画家』（瀬木慎一＋松尾国彦共訳、大阪フォルム画廊出版部、1974）より